説教20220313創世記12：1-8ヨハネ3：1-17「御子がこの世に来たのは」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

ニコデモが、夜にイエス様を訪問して問答するこの場面は、ペンテコステの翌週にもよく語られる聖書箇所です。ペンテコステで私たちは聖霊を受けます。そして、今の受難節では聖霊によって荒れ野に導かれています。どちらも聖霊の働きは絶大なのですが、聖霊は私たちの目には見えません。でも、見えないからと言って、今日のニコデモのように聖霊を疑っていると、なかなか私たちは幸せには成れないのです。。見えないものといえば、愛というものも、目に見えるものではないでしょう。だからこそ私たちは愛を形あるものとして見えるものとして目の前に置きたいと願うのです。

今日のヨハネによる福音書３章11節には「はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。」と記されています。イエス様はここで、私たち、あなた方という複数形の人称で人を呼んでいます。それはなぜかといいますと、このイエス様とニコデモの問答が一対一の関係性に留まらず、彼らがそれぞれ属している集団の関係性を表しているからです。つまり、イエス様は、ご自身や弟子たちが属する集団、広く言えば私たちクリスチャンも含まれるその集団を代表し、片やニコデモはファリサイ派やユダヤ人議員たちの集団を代表して、今夜の問答に臨んでいるのであります。

先ずニコデモのほうから見ていきましょう。ニコデモはファリサイ派の人々の中でも、イエス様に好感を持ち、或る程度イエス様を信じていた異色の存在でした。ファリサイ派と言えば、当時の社会における指導者層でありまして、多数の者を議会に送り込み、権力を持ち威張っていた存在でした。イエス様はニコデモことを教師と呼んでいますが、これは先生として傲慢なニコデモの態度に対するあてつけでありましょう。ちなみに、私も神学校を出て教会に遣わされた瞬間に先生と呼ばれるようになりました。又、同時に卒業した同級生たちも先生と呼ばれるようになりました。そうして同級生どうして呼び合う時も、たちまち基本、先生と呼び合うように変えられたのです。先生たちの集団に組み込まれたといえばそれまでですが、願わくはその先生集団が、傲慢ではなく、謙遜、従順の道を歩んでいけるよう祈ります。

ファリサイ派の人たちの傲慢さを端的に物語る聖書箇所は、安息日に麦の穂を摘む弟子たちをとがめだてする場面でしょう。マタイによる福音書12章 1節～

そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の

穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。

あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った。

ここでファリサイ派は、他人の畑の麦の穂を摘むことが泥棒だと言って、非難している訳ではありません。彼らが非難しているのは、安息日にしてはならないことを、弟子たちが犯したという事です。安息日にしてはならないこととは、一言で言えば労働ですが、ではどこまでが労働で、どこからが労働でないかは数多くの細則によって取り決められていました。安息日に禁じられた労働は1500種類以上に及んだという事です。それでこの麦畑での違反は具体的には①麦の穂を摘むことは、収穫に当たる。②手でもみ出すことは、脱穀に当たる。　③息を吹きかけることは、もみ殻の選別に当たる。　④麦を食べることは、貯蔵に当たる。という労働の細則に対する違反でした。ファリサイ派の人々は、その社会にあって全ての人の一挙手一投足を逐一監視して、このように違反者を摘発して、裁くような立場にいる人々だったのです。

このようにファリサイ派の人々のことを書きつらねていきますと、何とファリサイ派とは威張っていて罪深い集団なのだと思わされますが、ところがそれに属する本人たちは罪深いどころか、全く自分たちの方が正義だと思ってやっているわけです。。このような思い違いは何時の世にもあることで、私たちは自分自身を戒めていかねばなりません。

このようなファリサイ派の集団から抜け出て、ある夜、ひそやかにイエス様と面会したニコデモという人、この人が如何に好人物であったとしても、彼の発想や行いには自ずとファリサイ派の一員であることによる制約や嫌味が付きまとったことでしょう。ニコデモはイエス様と一対一で言葉を交わしますが、そのニコデモの言葉の背後には常にファリサイ派の言葉が付きまとっているのです。ニコデモは言います。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」、「どうして、そんなことがありえましょうか」このニコデモの発言には、長年ファリサイ派の一員として生きて来て、身についてしまったプライドや見識を誇る態度が現れていると思います。。それでも尚ニコデモはイエス様に惹かれて、彼のもとにやってきているのです。そこにも又イエス様の恵みが働いていることは明らかでしょう。

次に、もう一方の、イエス様や弟子たちやクリスチャンの側の集団に目を向けましょう。「はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししている。」とイエス様は言ってくださいました。つまり、イエス様は私たちはと言って、自分ひとりでなく、私たちクリスチャン一人一人のこととして、この夜の問答に臨んで下さっています。私たちにとって、「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」という事は、当たり前のことで疑う余地のないことです。なぜならば私たちは洗礼を受けて、聖霊を受けて生きる者へと変えられたからです。私たちは「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」という御言葉をそのまま受け入れることが出来ます。なぜなら私たちが御言葉を信じる者へと変えられているからです。

中世の修道士、聖ベルナルドゥスは旧約聖書の雅歌の説教をしました。聖書協会共同訳になりますが、雅歌１章４節、「私を引き寄せ／あなたの後ろから付いて行かせてください。／さあ、急ぎましょう。／王はその部屋に私を連れて行ってくれました。／楽しみましょう／あなたのもとで喜びましょう。／あなたの愛をぶどう酒よりもたたえましょう。／彼女たちはあなたをひたすらに愛します。」

何とも情愛に満ちた聖句ですが、ベルナルドゥスに限らず、教会は、この雅歌も聖書のうちの一つとしてずっと大切にしてきました。雅歌の中の愛し合う男女の姿は、花婿であるイエス様と、花婿である教会、つまり私たち一人一人のことを言い表しています。ベルナルドゥスは語ります。「もしも花嫁が、自分だけの力で、最愛の花婿のあとから思うままについていくことが出来るのなら、決してこんな［私を引き寄せ／あなたの後ろから付いて行かせてください］という願いはしなかったはずです。ところで、どうして花嫁は自分だけの力で、花婿のあとについて行くことが出来ないのでしょうか。花嫁は病弱なのでしょうか。ここに娘がいて、わたしはまだ力が足りませんから、どうぞ私を引っ張って行って下さい、と願うなら分かります。しかし、花嫁が、人妻が、すなわち他の人をぐんぐん引っ張って行けるほど強く、成熟した女性が、あたかも自分が病弱で力が足りないかのように、どうぞ私を引っ張って行って下さいと願っているのを見たら、誰だって変な感じがしませんか？」

この中世に語られた説教は、現代人が聞いてもドキッとさせられますが、この続きにこのように語られます。「キリストの花嫁である教会は、いつ、このような嘆息を漏らしたのでしょうか。それはおそらく花婿のキリストが、天にお昇りになるときだったのではないでしょうか。最愛の花婿キリストが天にお昇りになる時、花嫁なる教会も、花婿と一緒に天に昇りたい、彼のあとからついて行きたい、とどれほどありったけの情熱をこめて願ったことでしょう。花婿キリストと一緒に、自分も栄光の座に上げられたい、とどれほど激しく臨んだことでしょう。」

世を愛された神の愛は、この様に、私たちが天に昇る時に最も激しく表されるのでしょう。この世の歩みで、病弱な花嫁が花婿に対して［私を引き寄せ／あなたの後ろから付いて行かせてください］と願うことは、喜ばしいことです。なぜならそこに隣人愛が実現されるからです。それと同様に、私たちが花婿キリストによって天に召される時、天に上げられるその道のりは、［私を引き寄せ／あなたの後ろから付いて行かせてください］という願いなしには、一歩も前には進めないのです。イエス様が愛情をこめて私の手を取って、子どものように私を歩ませてくれない限り、私は天の国に至ることが出来ないのです。そこに神の愛が無い限り私たちは天の国へとついて行くことは出来ないのです。。そして残念なことに、人間には、そのように私を最も激しく愛してくれる人は、私一人だけを愛してくれないと嫌だという独占欲があります。それは私たちが肉から生まれた者でもあり、この世の歩みに於いて我が身を覆っている肉の部分を認めている限り致し方のないことなのでしょう。

そしてこの独占欲こそ、ニコデモのように２つの集団の間で揺れ動いているような人々にとって、イエス様を信じ切れないでいることの一因なのではないでしょうか。

また私たちクリスチャン自身も「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」という御言葉を、心が弱っているときなどに、聞き流してしまうことがあるかもしれません。そんな時はぜひ、雅歌の御言葉に立ち返ってください。主イエスキリストは、私たち全員を、一人の最愛の花嫁のように、ありったけの情熱をこめて愛し抜き、［私を引き寄せ／あなたの後ろから付いて行かせてください］という願いにこたえて、一人一人を最後の最後まで祝福し守ることが出来る唯一のお方です。イエス様の愛はその広さも深さも一人の人間の愛とは比べ物にならないのです。主イエスキリストの愛をこのように語ってきますと、イエス様が、まことの一人の情愛に満ちた本当の人でもあって、同時に愛に満ちた神様でもあるという、神と人が愛によって合わさったお姿が喜びと驚きに満ちて私たちの前に現れ出て、私たちはイエス様をほめたたえてしまうことでしょう。

私たちはニコデモのことを悪くは言えませんが、ニコデモがただの好人物として歩んでいる限り、彼に救いが訪れることはないということも又事実であります。どうか私たちは、この受難節に、ニコデモのように集団の中で息をひそめて、保身している方々一人一人の背中を押して、主イエスの情愛に満ちた救いの道へと招いて行ければと願います。

祈ります。

天の父

どうか私たちを聖霊で満たし、御手で引き寄せ、天の国へ至る歩みの一歩一歩をあなたの愛で守ってください。

私達はひたすらあなたに救いを求めます。この地を去る時に、あなたに引き寄せられることを待ち望んでいるからです。どうかこの地にあって、死の谷の影を歩まされるような苦難の中にあっても、常に私たちを引き寄せ守って下さい。

あなたは洗礼という儀式をもうけ、私たちが水と霊によって新たに生まれることが出来るようにしてくださいました。あなたのその救いのご計画に感謝し、讃美を捧げます。一人でも多くの隣人が、教会で洗礼を受けられますよう、恵みを下し、私たちを用いて仕えさせてください。又、この受難節に天入会者を与えて下さりありがとうございます。どうか私たちがイースターの喜びと共に、新しい兄弟姉妹の入会を喜び祝うことが出来るようにしてください。

今日は、礼拝後に３月定期総会が開かれます。どうかこの会議の最初から最後までをあなたがつかさどり、聖霊によって守って下さい。あなたの御心によってすべてが導かれ、議決されたことによって、あなたの御心を示してください。

父と聖霊と共に